

絵具遊び活動－アート週間活動報告－

野角 孝一¹⁾、吉岡 一洋¹⁾、矢田 崇洋²⁾、森下 英恵²⁾、岡谷 里香²⁾、
青木 佐樹²⁾、鎌倉 正子²⁾、中山 美香²⁾、玉瀬 友美²⁾

1) 高知大学大学院総合人間自然科学研究科教育学専攻

2) 高知大学教育学部附属幼稚園

Paint play activity－Art Week Activity Report－

KOUICHI Nozumi¹⁾, KAZUHIRO Yoshioka¹⁾, TAKAHIRO Yada²⁾, HANAE Morishita²⁾,

RIKA Okatani²⁾, SAKI Aoki²⁾, MASAKO Kamakura²⁾,

MIKA Nakayama²⁾, YUMI Tamase²⁾,

1) Kochi University Graduate School of Integrated Arts and Sciences Faculty of Education and
Studies in Education Program

2) Kindergarten Affiliated with the Faculty of Education, Kochi University

要約

これまで筆者は絵具遊び活動と称した絵具の混色に重点を置いた活動を行ってきた。本研究もその一環で行ったもので、制作者である美術教員が教育学部附属幼稚園の園児と共に絵画制作を行った。パネルや紙の水張り、下地作り等、園児達が普段経験しない工程まで見せることで、制作に興味を示してもらい、混色や色彩、絵画制作そのものの手法についての経験や知識を深め、園児の創作のための手がかりとなることを目的としている。研究を進める中で、当初の計画では園児達は絵画制作の見学だけを想定しており、美術教員が単独で完成まで描き進める予定であった。しかし完成まで園児達と共同で制作することとなり、筆者らが想定した以上に園児達の関心が高いことがわかった。

キーワード：絵具遊び活動、絵画、共同制作

1. はじめに

絵具遊び活動は2015年から高知大学教育学部附属幼稚園（以下、附属幼稚園と表記）と高知大学教育学部が継続して行っている活動で、特定のモチーフを設定せず、園児達に絵具で自由に遊んでもらう活動を指している。これまで附属幼稚園教諭と美術を専門とする大学教員との共同研究として、巨大な支持体と大量の絵具を用いた活動¹⁾や、モニュメントや小屋の彩色²⁾、版画³⁾など多岐に渡って継続してきた。平成20年告示の幼稚園教育要領の「表現」において、(1)「生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。」(7)「かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。」と表記されて

いるが、絵具遊び活動ではとりわけこの観点を大切にしており、園児達の自主性を重視しながら絵具や様々な道具を扱う機会を多く設けてきた。しかし本研究では園児主体の活動を前面に押し出すのではなく、美術を専門とする大学教員が附属幼稚園に1週間滞在し、制作するアート週間を設定することとした。

2. 研究の目的

本研究では附属幼稚園教諭と大学教員との打ち合わせの中で、絵画を専門とする教員による制作の様子を見せてほしいとの要望があり、1週間滞在して制作することとなった。単なる制作のみを見せることも可能であるが、パネル作りや画用紙の水張り、下地作りなどの工程を園児と一緒にを行い、大学教員が完成させる一連の工程を通じて、園児達に絵画制作に興味を示してもらうことを目的としている。尚、今回の制作では打ち合わせの中で動物を描くというテーマを設定した。通常の絵具遊び活動では特定のモチーフは設定しないが、今回は教員主体ということもあり、下地から完成まで固有色に囚われず、様々な色彩を用いても特定のモチーフであることを伝えるために敢えてテーマを設定した。

3. 研究の時期と内容

本研究ではアート週間として制作する時期と内容を次の①～⑤のように設定した。尚、①②については附属幼稚園年長組の園児が見学する時間を設け、③～⑤については大学教員が絵画制作を行い、年長組、年中組の園児達は興味があれば見学できることとした。

- ①2019年5月21日（火） パネル制作
- ②2019年5月27日（月） 画用紙の水張り、下地作り
- ③2019年5月28日（火） 下描き
- ④2019年5月30日（木） 描き込み
- ⑤2019年5月31日（金） 完成

4.1 ①パネル制作

アート週間に使用するパネルは持ち運びを考慮して、縦150cm×横91cmのパネルを3枚合わせたものを準備した。パネルは画用紙などに絵を描く際に、画用紙が波打つことを軽減することや堅牢に持ち運びができるという利点があるため、美術ではよく使用される基底材である。パネルは既製品もあるが、のこぎりなどの道具があれば比較的簡単に制作できるため、年長組の園児達の前で実践する計画であった。準備物は次の通りである。

準備物：ベニヤ板 182cm×91cmを3枚、1.9cm×3cm×180cmの角材を16本、のこぎり、かなづち、ボンド、定規、養生テープ、鉛筆、直定規

年長組の園児達が自分たちの身体より大きいパネルの材料となる角材とベニヤ板を率先して運ぶなど、積極的な姿勢が見られた【図1】【図2】。附属幼稚園ではアート週間の後にのこぎりを使用する機会を設ける予定だったので、園児達の関心の高さが窺えた。美術教員がのこぎりの説明を行った後で、担任と相談し、パネル制作に積極的に参加したいとの意思を汲み取り、のこぎりでの角材を裁断や大人でも難しいほぞの作成など、結果的にパネル作りの全ての工程を園児達と共同で行うこととなった【図3】【図4】。



【図 1】協力して角材を運ぶ園児達



【図 2】協力してベニヤ板を運ぶ園児達



【図 3】のこぎりで角材を裁断する様子



【図 4】かなづちでほぞを作成する様子

4.2 ②画用紙の水張り、下地作り

アート週間本番となり、前の週に作成したパネルに画用紙の水張りを行った。別の部屋で乾燥させておいたパネルを運ぶ際に、パネルの制作を行った年長組の園児達が率先してパネルを運んだ。これは年長組の園児にとってパネル制作が興味深く、次はどんなことをするのかという期待や関心の高さが具現化されたと推測される。

本研究では画用紙を水張りという方法でパネルに固定した。水張りとは紙が水を含むと伸びるという性質を利用した固定方法であるが、通常は附属幼稚園では行わない。そのためパネル制作を行った年長組の園児達が興味を持ち、そのまま一緒に画用紙の水張りを行った。園児達は美術教員が説明することをよく聞きながら、協力して作業を行っていた【図 5】【図 6】【図 7】【図 8】。

準備物：182cm×91cm のパネルを 3 枚、サンフラワーA 画用紙（ロール）、水張りテープ、刷毛、ボウル、水



【図 5】楽しくパネルを運ぶ様子



【図 6】刷毛にたっぷりの水を含ませる



【図 7】画用紙に水を引く様子



【図 8】協力して水張りテープに水を引く

水張りした画用紙が乾燥した後、絵画制作の下地作りを行った。下地とは絵画制作において最終的な色に持っていくための準備の色のことである。今回の制作ではアクリル系の絵具を使用するため隠蔽力が高く、上から絵具を塗布することで下に塗布した絵具を塗りつぶすことが可能である。絵画の制作方法は無数にあるが、制作の過程で色が次々と変化していく様子を園児達に見せたいため隠蔽力の高いアクリル系の絵具を選択した。

準備物：アクリル系の絵具（白色、赤色、桃色、黄緑色、紫色、青色、空色、黄色、黄土色、橙色、茶色）、筆、刷毛、ローラー、バット、プリンカップ、木炭

計画当初はここからの絵画制作は美術教員が担当する予定であったが、ここでもやはり年長組の園児達が参加したいとの意見があったため、下地作りを一緒に行うこととなった。

まず、園児達がワクワクするように美術教員が青色と橙色など補色などを混色して、ローラーで線を描くように絵具を塗布した【図 9】。園児達には他の道具も紹介し、絵具を混色することを条件として自由に絵具を塗布してもらった【図 10】。制作が進むに連れて混色する絵具の数が増え、画用紙の塗り残した部分が少なくなると絵具の混色そのものを楽しむ園児も増えてきた。これはこれまでの絵具遊び活動でも頻繁に見受けられた事例である【図 11】。また下地がある程度完成した後、後片付けの掃除まで一緒に行うことも頻繁に見受けられ、園児達は最後まで集中して活動を行っていた【図 12】。



【図 9】下地作りを実演する様子



【図 10】集中して下地作りをする園児達



【図 11】混色そのものを楽しむ園児達



【図 12】一緒に掃除する園児達

4.3 ③下描き

前日の下地作りを経て、木炭による動物の素描を行った。動物は附属幼稚園にある図鑑から園児達に選んでもらったものを描くようにした。実際には図鑑から描く場合や、普段から写生している動物を木炭で素描し直して、画面を構成した。素描を行った後、【図 13】のように象を混色した赤色や桃色の絵具を塗布して表現した。

これまでは年長組の園児達が制作に参加していたが、年中組の園児達も絵具を塗布したいという意見があったので参加してもらった。ある程度下地が塗布された段階で、素描や絵具でかたちを描き起こすことを試みたが、下地作りは継続されていたので、この日は思いっきり絵具を塗布してもらうことに切り替えた。従来の絵具遊び活動であれば全く問題はなく、積極的に混色を楽しんでいるのでむしろ成功と言えよう。しかし、作品を完成させる工程を見てほしいという目的自体を変更する必要が発生したため、附属幼稚園教諭と相談して、残り2日で③下描き、④描き込み、⑤完成まで3つの工程を進めていくこととした。



【図 13】動物を描く様子



【図 14】年中組による絵具の塗布

4.4 ③下描き、④描き込み、⑤完成

③下描きの園児達の様子を鑑み、3日目も絵具を塗布したいとの希望があることは容易に予想された。そこで園児達には急遽用意した色つきのコットン紙に絵具を塗布してもらうこととした。その際、コットン紙は後で使用することは予め園児達には伝えてある。準備物は次の通りである。

準備物：コットン紙（赤色、紫色、朽葉色、水色、薄桃色、焦茶色、薄紫色、象牙色）

園児達には好きな色のコットン紙を選んでもらい、好きなように絵具を混色して塗布してもらっ

た。その間に本画のほうに美術教員が動物のかたちを絵具の線で描き起こした。園児と筆頭著者が塗布する支持体を分けることによって棲み分けができるようになり、園児達も自分の紙という意識が高くなり、絵具を垂らす、あるいは絵具を飛ばすなど、様々な実験的な塗布がより多く見受けられるようになった【図15】【図16】。



【図15】コットン紙に絵具を垂らす様子



【図16】楽しく会話しながら絵具を塗布する様子

コットン紙に塗布した絵具が乾燥した後で、そのコットン紙を破りながらかたちを作り、本画へ糊を付けて貼り付けた【図17】【図18】。これはコラージュという技法で異なる質感や色彩の材料を画面に貼ることで画面に変化を与えることができる。さらにコラージュする際は画面に動きで出ることをねらって敢えて動物のかたちに合せないように貼り付けた。園児達も一緒にコラージュを行い、美術教員が消えた線を絵具で描き起こすという工程を加えながら作品は完成した。完成した作品は日曜参観で展示された【図19】。



【図17】コラージュの途中段階



【図18】園児達がコラージュする様子



【図 19】完成『みんなの動物園』縦 150 c m × 横 273 c m

5. 考察及び今後の課題

アート週間では一連の絵画制作を園児達に見せるため、パネル制作、画用紙の水張りなども園児達の前で実演した。絵画制作だけであれば予めそれらを準備した状態でアート週間に臨むことも可能であった。しかし、一からものを創り出すという観点ではやはり下準備まで実演する方がよいと考えられ、結果論ではあるがそのおかげで絵画制作に興味を示してもらい、下地作りやコラージュなど完成まで園児達は制作に参加することとなったと言ってよいだろう。

また、目的の一つに掲げた固有色に囚われない色彩を用いても特定のモチーフであることを伝えるという点については、こちらも当初の予定になかったコラージュを行うことでより固有色から離れ、結果的には成功したと言えよう。

上記のように本研究の目的は何とか果たせたと考えられる。しかし、筆者が想定した以上に園児達の関心が高く、それ故に多くの課題も見出された。とりわけ園児への絵具の配布の方法や絵具の種類など、様々な想定不足や準備不足が多々あった。アート週間を単なるイベントに終わらせるのではなく、その後の附属幼稚園での活動に活かしていくための具体的な方法も今後検討していかなくてはならない。

謝辞

本研究の実施にあたり、令和元年度高知大学学長裁量経費「地域に根ざす芸術教育拠点づくり—附属機関との横断的研究体制の構築—」の助成を受けました。記して感謝の意を表します。

参考・引用文献

- 1 野角孝一, 土井原崇浩, 玉瀬友美, 谷脇のぞみ, 岡谷里香, 都築郁子, 森下英恵「絵具遊び活動の検証—高知大学教育学部附属幼稚園での実践を通して—」高知大学教育実践研究, 第 31 号, P. 9-16, 2017 年。
- 2 野中陽一朗, 岡谷里香, 森下英恵, 谷脇のぞみ, 土井原崇浩, 野角孝一, 吉岡一洋, 小松和佳, 玉瀬友

- 美「描画活動における幼児の空間利用状況に関する探索的検討一定点観測結果を参照しながら」高知大学教育学部研究報告, 第 77 号, P. 21-31, 2017 年。
- 3 玉瀬友美, 土井原崇浩, 中村るい, 野角孝一, 野中陽一朗, 谷脇のぞみ, 斉藤雅洋, 柴英里, 吉岡一洋『子どもとアートを地域でつなぐ』リーブル社, 2019 年。
- 4 文部科学省『幼稚園教育要領 (平成 20 年告示)』http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/nerai.htm (2019 年 11 月 26 日最終閲覧)

図版

【図 1～19】附属幼稚園教諭が撮影。